

### III 遺 物

出土遺物を瓦搏類・土器類・木製品・金属製品などの順に報告する。木簡が8点出土しているが、少数かつ小片なので、木製品の項であわせて扱う。

以下に述べるように、新種の軒瓦が多く出土したこと、平城宮と同范の軒瓦および鬼瓦の存在、墨書人面土器が比較的多いこと、海獣葡萄鏡の出土などは遺跡の性格を知る上で貴重な資料となろう。また、各条坊遺構から出土した多種多量の土器類は、各遺構の存続期間を示している。これによって一般の条坊遺構は9世紀初頭には廃絶したが、九条大路北側溝SD01の後裔は中世まで残り、流路をやや南に変え水底を高くしたものの、蟹川として現在まで踏襲されてきたことが判明した。

#### 1. 屋瓦と搏

瓦搏類は四つの発掘区から大量に出土した。そのうちの多くは九条大路北側溝SD01・築地雨落溝SD02・坊間大路西側溝SD08および坪境小路東西両側溝SD13・14から出土したものである。IV区に関しては、SD01をごく一部しか発掘していないので、瓦の出土量も相対的に少ない。

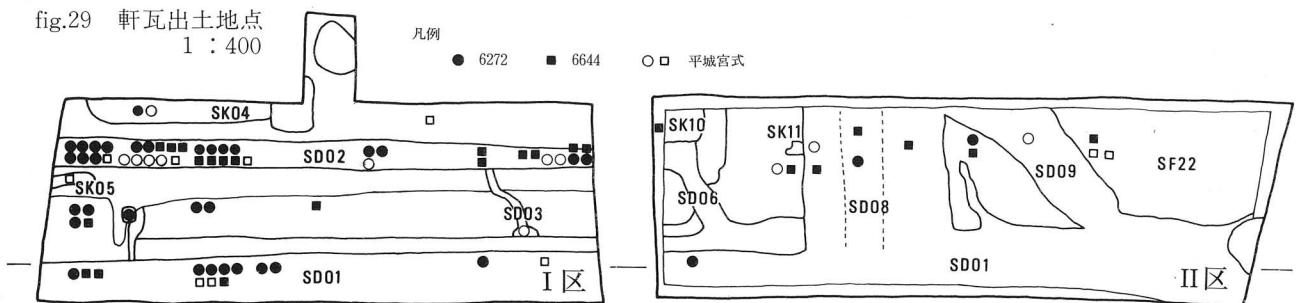
出土した瓦搏類のうちもっとも多数を占めるのは丸瓦と平瓦である。ついで軒丸瓦が56点、軒平瓦が31点あり、そのほかに鬼瓦2、熨斗瓦1、用途不明の異形瓦製品2などを含んでいる。軒瓦の出土地点をfig. 29に示した。大半がI区からの出土にかかり、特にその西半に分布が集中していることが見とれよう。なお、記述にあたっては、奈良国立文化財研究所が設定した型式番号を用いる。

**軒丸瓦** (fig. 30・31) 軒丸瓦56点のうち、細片のため型式の同定ができない7点を除く49点を、4型式6種に分類することができる。

6272は新型式で、外区外縁に細かな面違鋸歯紋、内縁に珠紋をめぐらせた複弁8弁蓮華紋軒丸瓦である。弁区よりも少し突出した中房に1+4+8の蓮子を配する。紋様の割付けには規則性があって、内側の4個の蓮子は対向する間弁を結ぶ線上にのり、外側の8個は線と線の中間に配されている。また、珠紋は線内に各4個あて割付けられている。蓮弁は肉厚に表現されているが、軸線方向の盛りあがりと弁端の反りあがりはほとんどない。外縁は三角縁で、瓦当は極めて薄い (fig. 31-6)。丸瓦部は、瓦当近くの僅かな部分が残るに過ぎないが、凸面を縦方向のヘラケズリ、凹面をナデによって調整してある。灰色で焼成堅緻なものと、淡褐色で軟質のものがある。6272型式は後述する軒平瓦6644型式と組み合うものと思われる。

6272型式はA・Bの2種に分けられる (fig. 31-1~5)。BはAに比して外縁の傾斜がゆるく、内縁に珠紋帯の内外をめぐって2本の圈線が加わる。また、Bの子葉・間弁はAより細く、間弁の頭部が凹む。珠紋数は32個でA・B等しいが、Bの珠紋は小ぶりで頂部がとがる。中房蓮子もBはAより小粒である。BはAよりも全体的に退化していると言えよう。Aには範型のキズを示す資料がある。A32点、B3点出土。なお、6272Bが平城京左京三条二坊九坪から1点、二条五坊九坪から3点出土している。  
(註2)

fig.29 軒瓦出土地点  
1:400



6311型式は外区外縁に線鋸歯紋、内縁に珠紋をめぐらせた複弁8弁蓮華紋軒丸瓦で、平城宮の内裏地域でもっとも多く出土し、平城宮を代表する瓦の一つである。A～Dの4種に細分されており、そのうちAが2点、Bが1点と細片のため種の認定が困難なもの8点が出土した。平城宮ではこの6311A・Bは軒平瓦6664D・Fと組み合い、第II期（養老5年～天平17年）に編年されている。また、平城京域においてもまま出土することがあり、先に触れた左京二条五坊九坪や三条二坊七坪などをあげることができる。  
(註3)

6282型式は線鋸歯紋と珠紋を外区にもつ複弁8弁蓮華紋軒丸瓦で、平城宮では大膳職地域あるいは東院地区で多く出土する傾向があるほか、京域でも知られている。軒平瓦6721型式と組み合い、A・B、D～I、Lの9種に細分される。今回出土したのは内区の小片だが、Fと判断でき、平城宮軒瓦編年では第III期（天平17年～天平勝宝年間）に位置づけられる。2点出土。

以上のほか、6133型式1、型式不明の小片4、連珠紋を主紋とするもの1および新型式2点がある。新型式2点は直立縁で外縁の平坦な複弁8弁蓮華紋軒丸瓦だが、小片のため新たな型式を設定することはできなかった。

軒平瓦31点のうち、型式同定不可能な1点を除く30点を、  
軒平瓦 (fig. 32・33) 6型式10種に分類することができる。

6644は上外区に珠紋、下外区に線鋸歯紋をもつ偏行唐草紋軒平瓦で、従来A種のみが知られていた（平城宮、平城京左京三条二坊七坪・二条五坊九坪、薬師寺、唐招提寺など）。今回、このA種3点とともに別種のB4点、C6点および細分困難な小片6点が出土した。

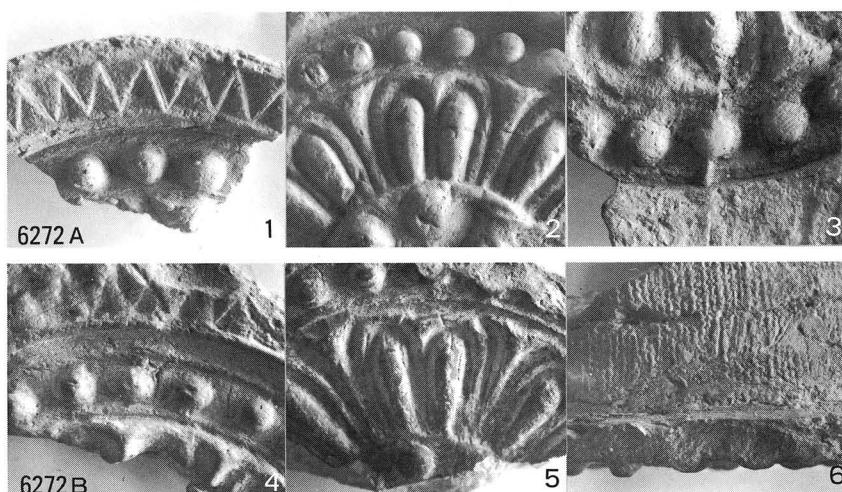
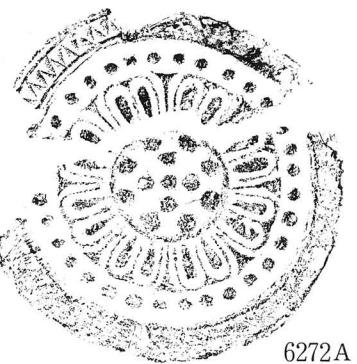
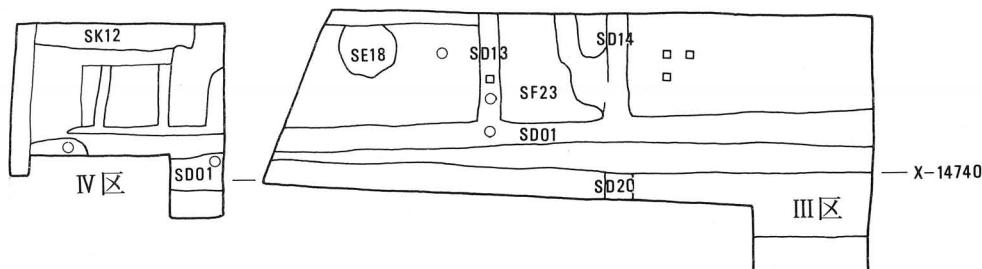
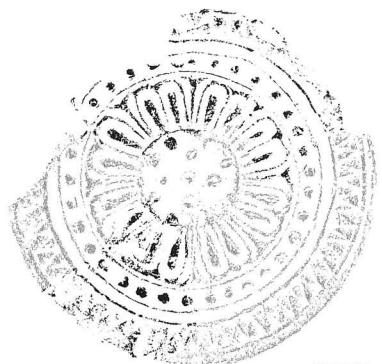


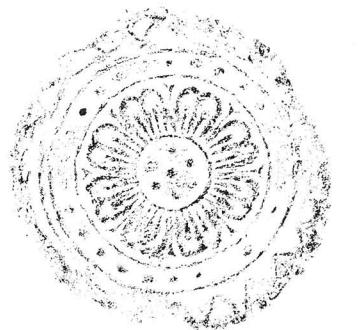
fig.31 6272型式細部



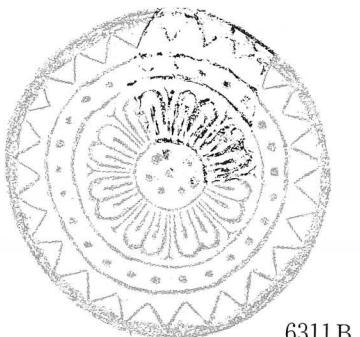
6272A



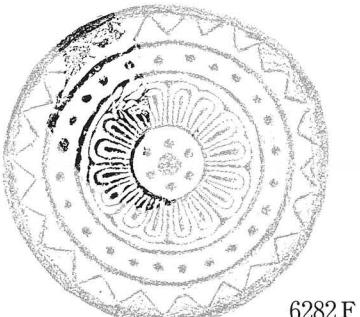
6272B



6311A



6311B



6282F

fig.30 軒丸瓦 1:4

A・B・Cの内区紋様はともにいわゆる“変形忍冬唐草紋”で、左から右に流れる右偏行だが、A・Cが7回反転であるのに対して、Bは最終単位が右さがりで、偶数回反転と考えられる。Bの各単位がA・Cに比して短小なので、小型品とみて、図では6回反転に復原した。唐草第1単位から派生する第2支葉を見ると、いずれも2葉が茎から遊離するが、Aが楔形2個であるのに対してCは2本の曲線（うち1本は蕨手状に外湾する）から成る。Bは破損していて定かでないがCに近い。各単位の間に配された蕾の形もA・B・Cでそれぞれ異なる（fig. 33）。

焼成には暗灰色で堅緻なもの、灰黒色でやや軟質のもの、および淡褐色軟質の3者がみられる。すべて段顎、顎面と平瓦部凸面をていねいに横ナデでしあげる。平瓦部凸面に貼りつけた粘土が剥れた痕跡を示すものがあり、顎は“貼りつけ段顎”と判断できる。平瓦部凹面には、ナデで布目を消去したものと不調整で布目を残すものがある。ただし、焼成や整形の差は種別とは結びつかない。

6664型式は花頭形の中心飾の左右に3回反転均整唐草紋を配し、外区に珠紋をめぐらす。平城宮内裏地域や第一次朝堂院地域から多量に出土し、A～D、F～Oの14種に細分される。今回出土したのはこのうちD・F・K各1点と細分不可能なもの3点である。いずれも小片で平瓦部の調整法などは判らない。なお、6664Dは平城宮

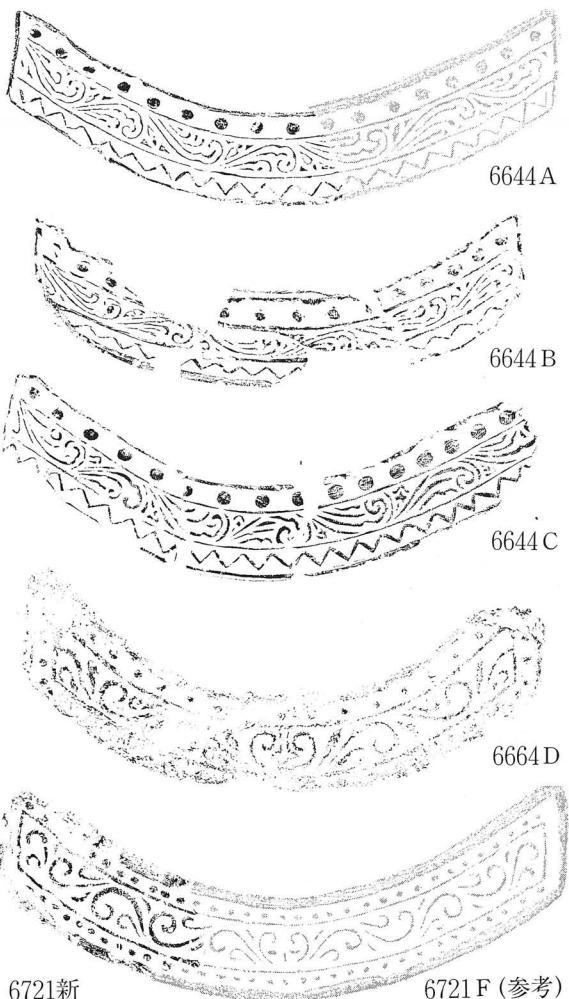


fig.32 軒平瓦 1:4

6644 C 軒瓦編年第II期に属す。

6721型式は5回反転の均整唐草紋軒平瓦で、A・C～Kの10種に細分されている。平城宮大膳職地域や東院地区で多く出土するが、J・K両種は京域から出土する傾向が強い。今回出土した2点のうちの1点は、左半の4回反転分の資料で中心飾を欠くが、珠紋や唐草はFに近似する。しかし、唐草の茎や支葉が太く大ぶりである点から、新種と判断した。曲線顎である。平瓦部凸面は縦方向のヘラケズリで調整、凹面は瓦当近くを調整するのみで、布目痕を残す。ほかの1点は磨滅のため種の判別ができない。

以上のほかに6667 A、6691 A、6694 A各1および型式設定困難な新型式1点がある。

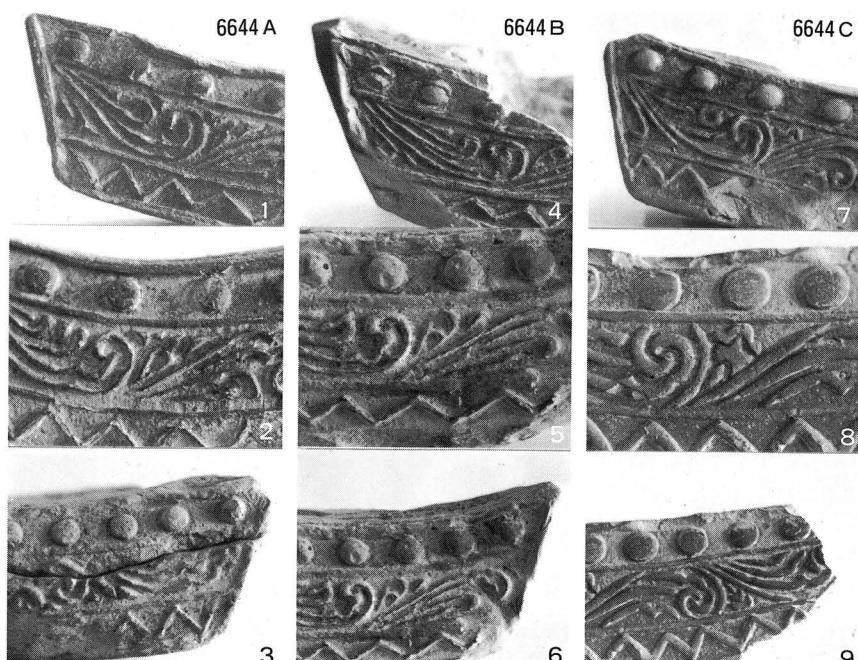


fig.33 6644型式細部

### 丸・平瓦 (fig. 34)

丸瓦はすべて玉縁式で、行基葺式のものはみあたらない。凹面には布目を残すが、凸面は縦方向のヘラケズリによって成・整形痕を消去してある。長さ37~34cm、厚さ1.5cm前後がふつう。まれに厚さ0.8cmほどの薄形品がみられる。暗灰色で焼成堅緻なものと、灰白色で軟質のものとがあり、後者が圧倒的に多い。玉縁に凸線をめぐらせた個体が15あり、うち3点は凸線が2本ある。

平瓦の大部分は一枚作りで、凹面に模骨痕を有するのは数点に過ぎない。凸面の整形はほとんどが繩叩きだが、僅か3点格子叩きをもつものがある。繩叩きの大半は縦方向、横位が数十個体あるが、1割にも満たない。

丸瓦凸面にキ印のヘラ描きをもつものがある。

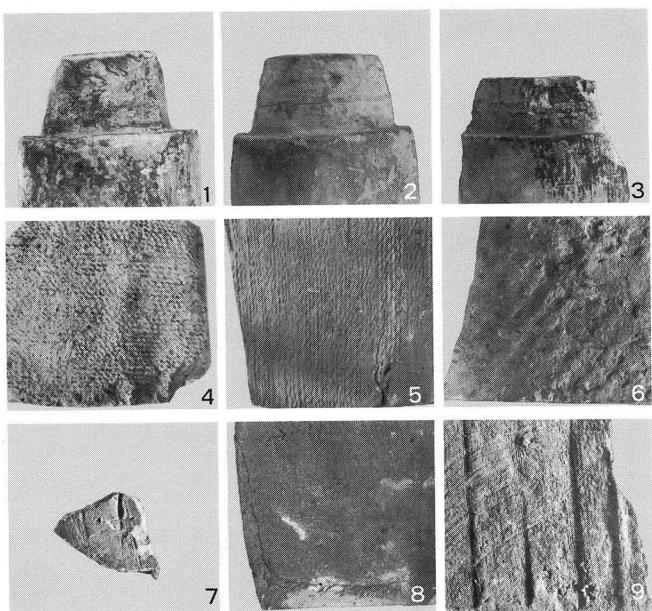


fig.34 丸・平瓦細部

### 鬼瓦 (fig. 35)

平城宮 I A式の鬼瓦である。外縁と下端の一部を欠くがほぼ完形に近いものと、右膝部分の破片がある。

(註5)

平城宮式の鬼瓦はI~IVの4型式に大別される。

I式は蹲踞した姿勢の全身像を、II~IV式は顔面のみをあらわしたものである。I型式はさらにA(大型)とB(小型)とに細分できる。AはBに比べて写実的であり、眉の上縁に刻目を入れる点、体部の巻毛の内側に幅広の傾斜面をつける点でもBと異なる。外縁は傾斜縁である。全長39.9cm、最大幅42.2cm。I A型式は平城宮のほか中山4~6号窯から出土しており、蓮華紋や幾何学紋の鬼瓦を除外すれば、最古の鬼瓦である。



fig.35 鬼瓦 1:5

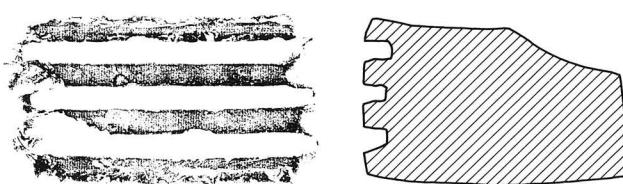


fig.36 異形瓦製品 1:3

### 異形瓦製品 (fig. 36)

図のように、重弧紋軒平瓦

に似た瓦製品である。

両側を欠くので本来の形は判らない。正面の凹凸は范型に押し込んでつくる。上面の奥半分を斜めに削り落す。高さ6.7cm、奥行10.5cm。薬師寺に類例あり。

註 1 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告II』  
(奈文研学報15) 1962年

2 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書  
昭和54年度』 1980年。

3 奈良国立文化財研究所『昭和52年度平城宮跡発掘調  
査部発掘調査概報』 1978年。

4 奈良六大寺大觀刊行会『奈良六大寺大觀』12、唐  
招提寺1、1969年。

5 毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦—8世紀を中心  
として—」『研究論集』VI (奈文研学報38)

## 2. 土器・土製品

検出した平城京の条坊遺構から、奈良時代～平安時代前期の土器類が出土した。奈良時代前半の土器が中心で、奈良時代末～平安時代前半の土器は少量である。大部分は土師器と須恵器で、少量の黒色土器・綠釉陶器・二彩陶器・製塩土器を含む。器種構成は京内一般のありかたを示し、土師器の煮沸形態（甕・鍋・竈）が最も多く、次いで須恵器の貯蔵形態（壺・甕）、供膳形態の順になる。日常使用された土器類の他に、祭祀に使用された人面土器・模型土器（甕・竈）・土馬なども相当量出土した。このほか、遺物包含層や旧蟹川の堆積から、瓦器・瓦質土器・信楽焼などの中世陶器、中国製青白磁、郡山城に関連する近世陶磁器類も多量に出土した。本書では、奈良時代の遺構から出土したものを中心と報告する。記述を簡略化するために、器種・調整手法は記号化した。（註）土師器の調整手法の記述で、ヨコナデは回転を利用したナデを指し、単なるナデと区別する。須恵器の場合、ヘラケズリは原則としてロクロ回転を利用したヘラケズリを指す。また、編年の大要は表2の通りである。

（註）器種名で使用するアルファベットは『平城宮発掘調査報告VII』の巻末の器種表に準拠している。土師器の調整手法は、口縁部だけをヨコナデする（a手法）、底部外面をヘラケズリする（b手法）、外面全面をヘラケズリする（c手法）、手の上で粘土紐を巻き上げて成形し口縁部だけを強くヨコナデする（e手法）を区別する。

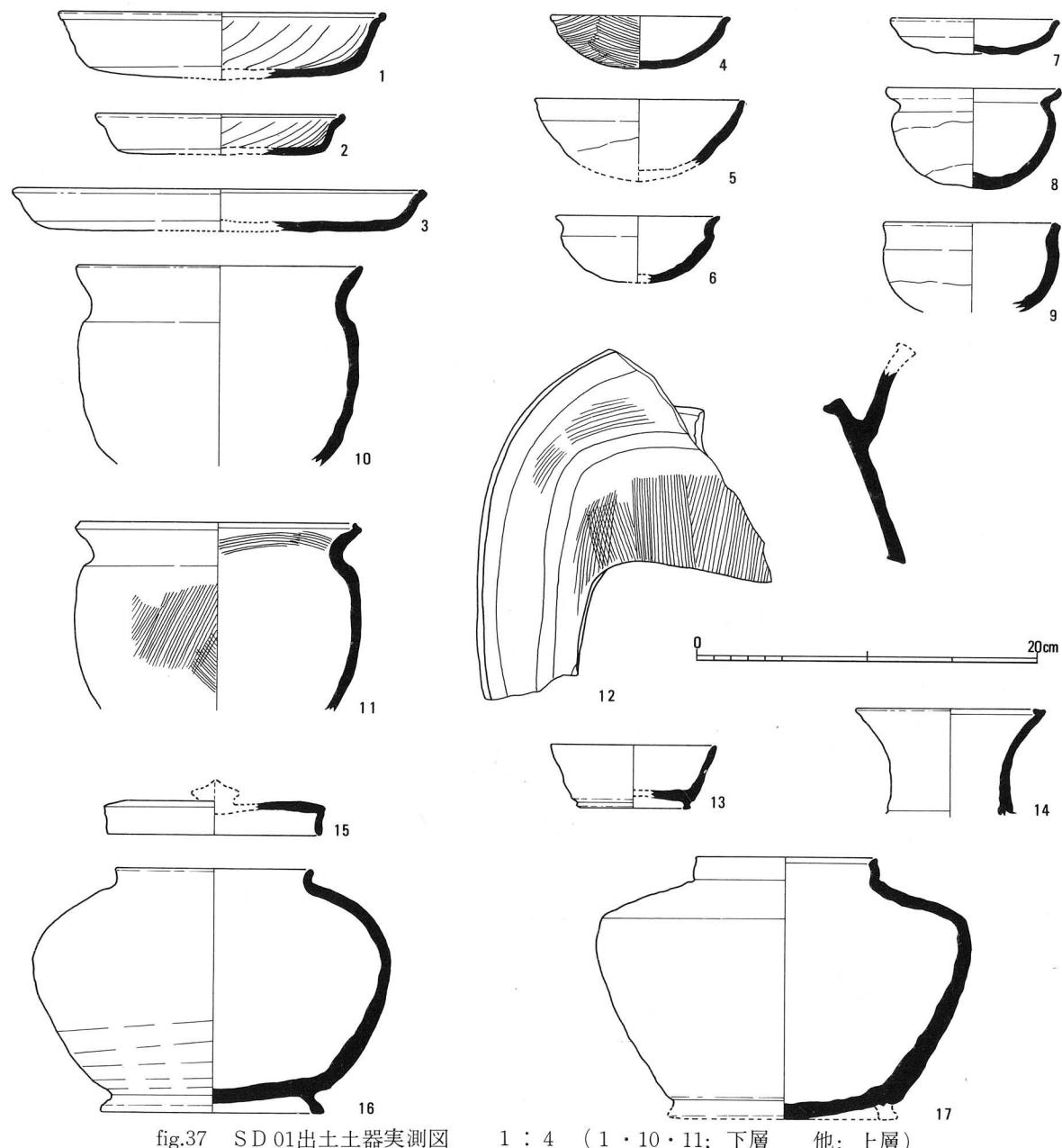


fig.37 SD 01出土土器実測図 1 : 4 (1・10・11; 下層 他; 上層)

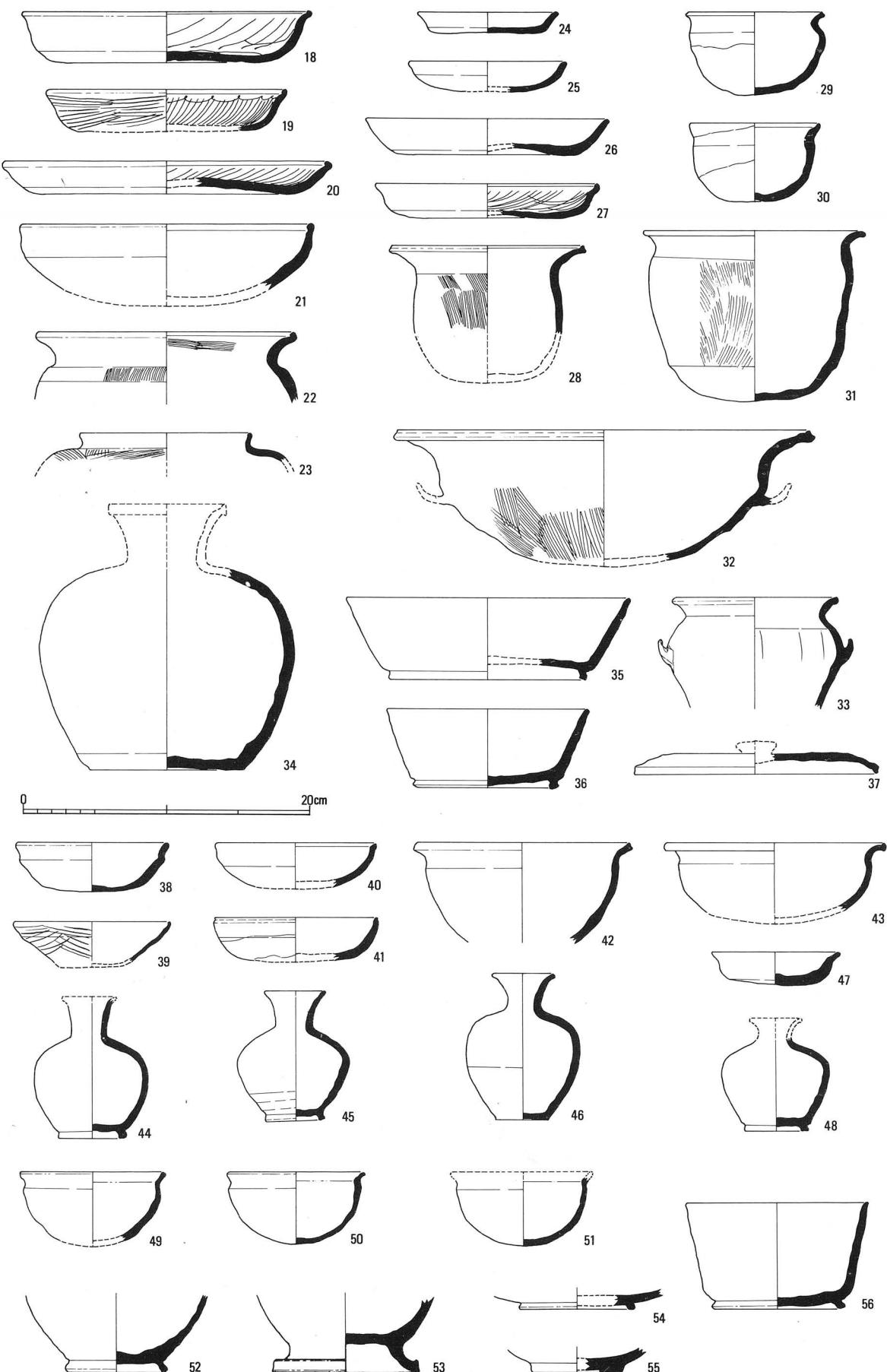


fig.38 出土土器実測図 1 : 4 (18~37; SD 08  
 49~51; SK 11 38~45; SD 09  
 52~55; 施釉陶器 46~48; SD 02  
 56; 漆塗土器)

**SD 01出土土器 (fig. 37)**

九条大路北側溝 SD 01から出土した土師器には、杯A (1)・杯B・皿A (2・3)・皿C (7)・椀A (5)・椀C (4)・墨書人面土器と器形や手法が共通する小型壺類 (6・8・9)・甕A (10・11)・竈 (12)などがある。下層出土の杯・皿類は1のような粗い暗文を持ち、なかには口縁部にヘラ磨きを施した例もある。調整手法もa・b両手法に限られ、c手法は見られず、平城宮III期の特色を示す。上層からは、平城宮III期以降～平安時代初頭頃の土器類が出土している。椀には口縁部上半部の立ち上がりがゆるいもの (5)と直立し端部が外反するもの (4)とがある。前者はe手法、後者はc手法で調整した後、細かいヘラ磨きを施す。小型壺類はいずれも口縁部だけをヨコナデし、胴部以下は調整せず粘土紐の痕跡をとどめる。竈は多量に出土したが、全容を窺える資料は少ない。いずれも截頭砲弾形の下半部をえぐり取った焚口の周囲に幅の広い廂を持つ型式である。須恵器には、杯A・杯B (13)・杯蓋・皿・壺A (16)・壺B (17)・横瓶 (14)・壺蓋 (15)などがある。壺 (16・17)はいずれも高台を付し、16は胴下半部以下にヘラケズリを施す。17は高台を貼り付ける部分に沈線を数本刻み込んで、接合の強化をはかっている。

**SD 08出土土器 (fig. 38)**

坊間大路西側溝 SD 08の下層から出土した土師器には、杯A (18・19)・杯B・皿A (20・25～27)・皿C (24)・鉢B (21)・壺A (23)・小型壺 (29・30)・甕A (22)・甕B (33)・甕D (28・31)・鍋B (32)・竈がある。須恵器には杯A・杯B (35・36)・杯蓋 (37)・壺L (34)などがある。これらの土器類は、平城宮II期のものも含むが、大多数は平城宮III期のものである。土師器の杯・皿の調整にはa・b両手法があるが、b手法が多く、これには暗文を施している。甕D (31)は浅い皿あるいは椀を型として中に粘土を詰め込んで底部を作る。型より上位の部分は粘土紐を巻き上げて成形している。型は回転台として胴部・口縁部の調整にも使われ、調整終了後にとりはずしている。底部と胴部との境は段をなし、その部分に外反する型の口縁端部の痕跡が見られる。この種の成形法は一般的なものではなく、墨書人面土器のうち(註1)口縁部が直角に近い角度で外反する甕D形態に見られる手法である。このほかに特記すべきものとして、土師器の杯あるいは皿の破片で、底部外面にロクロ回転を利用してヘラケズリ調整痕を留める例が1点、内面に同心円文の当て板痕跡を持ち、外面には叩き目とハケ目を持つ甕の破片が少量出土した (fig. 39)。

**SD 09出土土器 (fig. 38)**

坊間大路西側溝の氾濫 SD 09から、土師器椀 (38～41)・人面土器用の甕 (42・43)・甕A・竈、須恵器の壺M (44・45)・甕などが出土した。土師器椀には口縁部上端部が立ち上がるものの (38)と、器壁が薄く口縁部の中位が屈曲し上位が内湾気味に立ち上がるものの (39)と、内湾する口縁部を持つもの (40・41)とがある。39は口縁部に粗いヘラ磨きを施す。39のような形態は平城京では類例(註2)が少ないが、長岡京では普遍的である。須恵器壺M (44・45)はロクロ水挽成形で底部はヘラで切り離す。

**SD 02出土土器 (fig. 38)**

十二坪の築地雨落溝 SD 02からは、多量の瓦に混って奈良時代末～平安時代初頭の土器が少量出土した。須恵器皿E (47)は平底で短かい口縁部を端部近くで大きく外側に折り返す。底部はヘラ切りのまま放置する。灯明皿として使用している。壺M (46・48)はロクロ水挽成形で、46は回転糸切り、48はヘラ切りで底部を切り離している。

**SK 11出土土器 (fig. 38)**

SD 08西岸の小土壙 SK 11から同形態の土師器小壺が5個出土した (49～51)。いずれも表面が剥落しているために墨書の有無は定かでないが、104の土器と手法・形態が共通することから、祭祀用土器と思われる。

(註1) たとえば奈良国立文化財研究所『平城京左京八条三坊発掘調査概報』P.36、1976年

(註2) 百瀬ちどり「長岡京の供膳形態の土師器について」『長岡京』第11号、1979年

	略年代	標準遺構	報告書
平城宮 I 期	710年頃	SD 1900	平城報告 IX
II	730	SD 485	VI
III	750	SK 820	VII
IV	765	SK 219	II
V	780	SK 2113	VII

表2 平城宮の土器編年



fig.39 土師器甕片 1:3

**SK 12出土土器** (fig. 40・42)

IV区の土壌SK 12から出土した土器類は、年代・器種構成の上で比較的まとまつた好資料である。土師器には杯A (57)・皿A (58)・皿C (61・62)・椀C (63)・鉢B (59・60)・壺蓋 (64)・壺 (65)・甕A (66~69)・竈 (70)がある。杯A (57)・皿A (58)はb手法で調整し、57は口縁部外面にヘラ磨きを施す。皿Cはいずれもa手法で調整している。鉢Bには、大型で内湾する口縁部をもつもの (59) と口縁部上半部が立ち上がるもの (60) とがあり、ともに口縁部上端近辺から下はヘラケズりで調整するが、59は口縁部外面に横方向のヘラ磨きを施す。壺蓋 (64) は平端な頂部とゆるく内湾する縁部からなる。甕A (66) は口縁部に横方向のヘラ磨きを施す。甕C (67) は口縁部に横方向のヘラ磨きを施す。甕C (68) は口縁部に横方向のヘラ磨きを施す。甕C (69) は口縁部に横方向のヘラ磨きを施す。竈 (70) は内側に内湾する口縁部をもつものである。

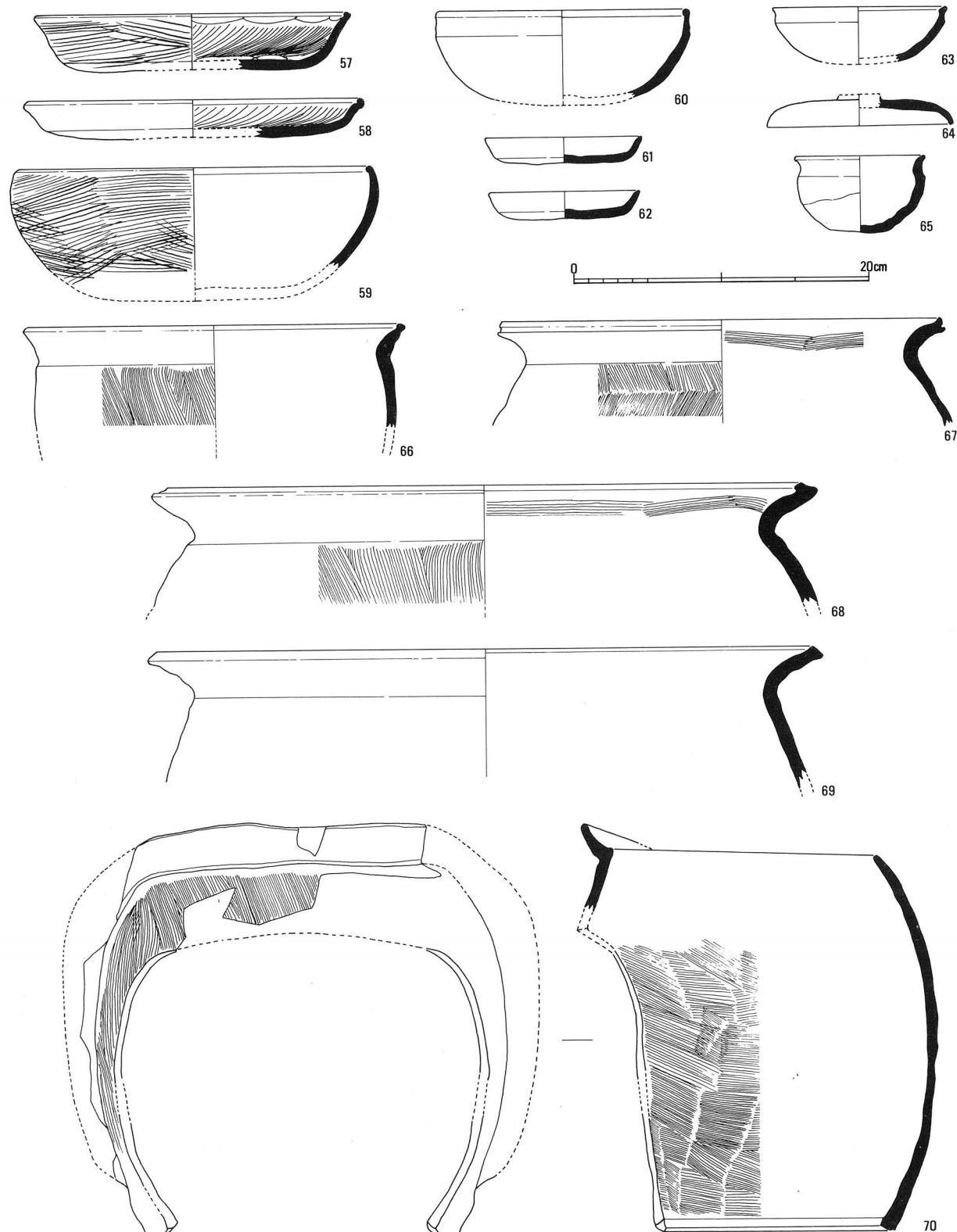


fig.40 SK 12出土土器実測図 1:4

ら成り、頂部に長方形のつまみが付く。壺(65)は口縁部のみをヨコナデし、以下をナデ調整する。65と同形態で漆を入れた例がある。甕A(68・69)は口径45cmにおよぶ大型品で、69はハケ目を施さない。竈は底径21cm、器高28cmの中型品で、截頭砲弾形の円筒の下部をヘラでえぐった焚口の周囲に廻を付けている。外面はタテ方向、内面は断続的にヨコ方向のハケ目を施す。内面調整は下から上へ順次行なうが、工具の目に粘土が詰まり、口縁部近くではハケ目が現われない。須恵器には、杯A(71~73)・杯B(76・77)・杯E(74・78)・杯蓋(81~84)・托(80)・平瓶(86)・壺H(75)・壺K(89)・壺C(79)・壺蓋(85)・甕A(87・88)などがある。杯類は底部外面をナデ調整するものが多い。杯Eは口縁部端部近くで内側に屈曲するもの(74)と、内湾気味に立ち上がり端部が平坦で内傾するもの(78)とがある。杯蓋には縁部が屈曲するもの(81・82)と、ゆるく内湾するもの(83・84)とがあり、いずれも頂部をヘラケズリで調整する。82は火櫻痕を残す。托(80)は高台付の浅い皿状の台に壺<sup>(註1)</sup>状の口縁部を載せた形態で、類例としては、須恵器では愛知県高蔵寺2号窯出土例、三彩では福島県小浜代遺跡<sup>(註2)</sup>出土例がある。SK12出土土器のうち71・77・86は平城宮I期、他は平城宮II期のものである。

**SE 18出土土器** (fig. 42)

III区の井戸SE 18の埋土から、平城宮II期の土器が出土した。土師器には杯A(90)・

皿A(91)・鉢B・盤B、須恵器には杯蓋(92)・甕などの破片がある。杯A(90)・

皿A(91)はa手法で調整する。91は底部周縁から口縁部にヘラ磨きを施す。杯蓋(92)は転用硯である。

**SD 13・14出土土器** (fig. 42)

坪境小路の東西両側溝SD 13・14から少量の土器類が出土した。土師器には杯

A・皿A・甕・竈、須恵器には杯A・杯B・杯C(94)・杯蓋(93)・皿B・鉢

A・壺C(97)・壺(98)・甕A(95)・甕(96)がある。小片が多く保存状態も悪い。杯C(94)は土師器の杯Aを模した形態で、底部にはヘラケズリを施す。壺C(97)は平底で、直立する短い口縁部と幅広い肩と丸味をもった胴部とから成り、肩に稜を持つ。底部はヘラ切りのまま放置する。壺(98)は頸部付け根から大きく外反する口縁部と丸味を持つ胴部とから成る。甕(96)は小片であるが、厚さが2.6cmもあり、相当の大型品と考えられる。内面に有機物が付着する。このほか平安時代前半の黒色土器碗や土師器鍔釜が出土し、溝の廃絶期を示している。

**SD 17出土土器** (fig. 42)

III区の東西築地雨落溝SD 17の上層から、和同銭と共に少量の土器が出土した。

多くは細片で、全容を知り得るのは須恵器の壺C(99)と平瓶(100)である。壺Cは

球形の胴部を持つ。胴部はヘラケズリの後にロクロナデを施し、底部はナデで調整する。平瓶は広い平底と低く短い胴部と盛り上がりの少ない背とを持つ。底部はヘラケズリ、胴部より上はロクロナデ。

**施釉陶器** (fig. 38)

施釉陶器には二彩と緑釉とがある。53は外反する圈足状の高台に卵形

の胴部を持つ二彩瓶で、暗緑から黄緑色の釉を基調とし、白釉を斑文状

にあしらう。胎土には水簸した灰黄色を帯びる白色粘土を使用する。SD 02から出土した。

52は内外全面に釉掛けするが、2次的に火を受け、釉の変色が著しい。残りの良い部分では

濃緑から黄緑色を呈し、部分的に白釉・褐釉らしい発色があり、二彩・三彩の可能性もある。

胴部下半部から底部はヘラケズリで調整する。胎土は53よりも粗く、長石粒を含む。薬壺型

の器形になると考えられる。SD 08から出土した。54は緑釉硬陶で、貼り付け高台を持つ皿

の底部破片、55は緑釉軟陶で、削り出しの蛇目高台を持つ碗の破片である。両者ともにIV区

の遺物包含層から出土した。

**墨書き土器** (fig. 41)

墨書き土器は6点出土したが、判読可能なものとしては、1-「南」・2

-「真」カ・3-「+」がある。1・3は杯A、2は杯Bの底部外面

に書かれている。1はSD 13、2はSD 02、3はIII区の遺物包含層から出土した。

(註1) 檜崎彰一『猿投窯』陶器全集31、図版39の上、1965年。

(註2) 五島美術館『日本の三彩と緑釉』図版19-2、1974年。



fig. 41 墨書き土器  
(1:1)

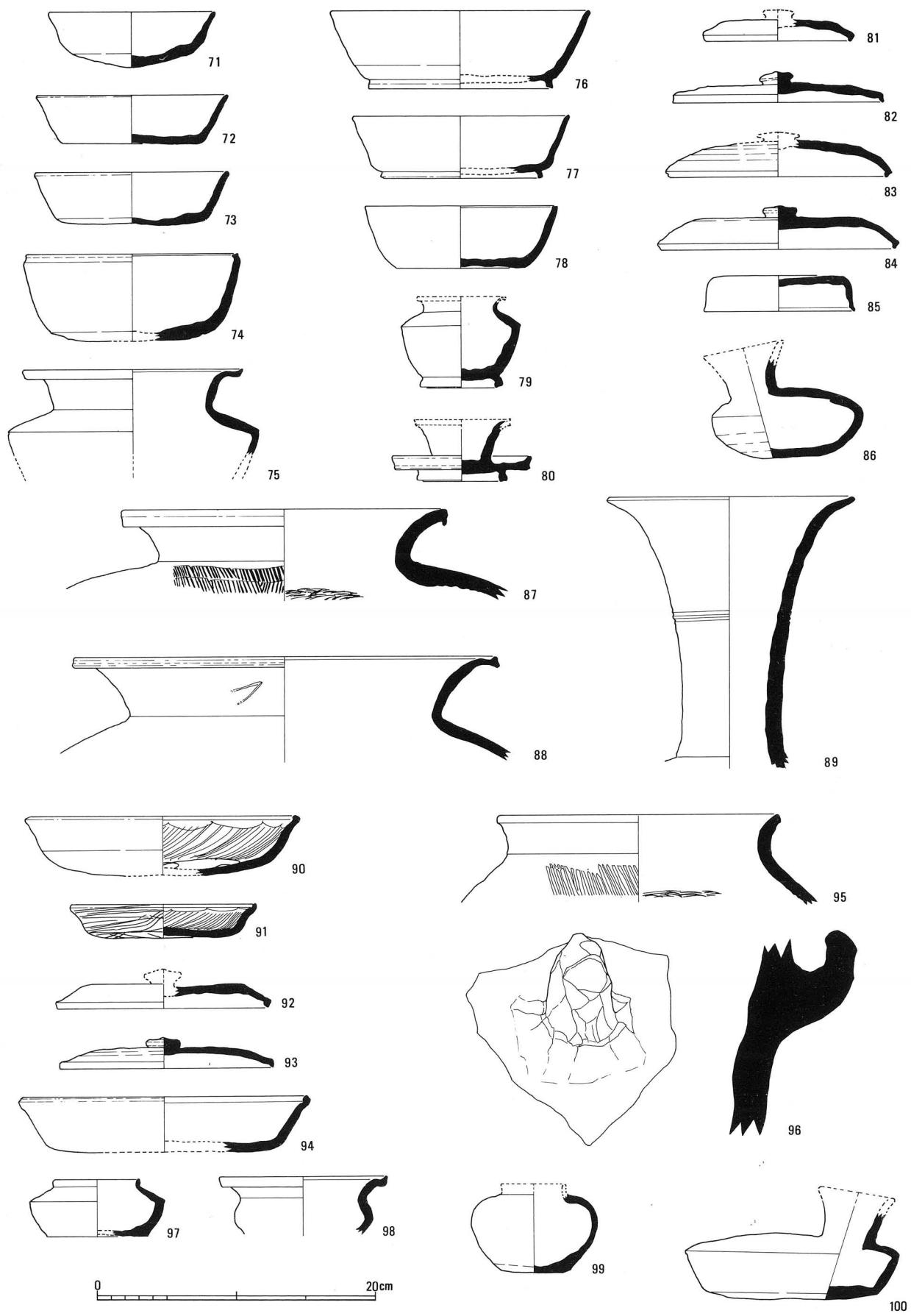


fig.42 出土土器実測図 1 : 4 (71~89; SK 12 90~92; SE 18 93~96; SD 13  
97・98; SD 14 99・100; SD 17)

製塙土器 SD 02・SD 08・SD 13などから少量出土したが、全容を窺えるものはない。厚手で砂粒を多量に  
(註) 含む。平城京左京三条四坊七坪出土例のように、尖底で口縁部が内湾する形態と考えられる。

漆付土器 漆の付着した土器が少量出土している。多くは漆容器として使用したもので、土師器小壺や皿が多い。56は内面に漆を塗布した須恵器碗Bで、III区の遺物包含層から出土した。

祭祀用土器および  
土製品 (fig. 43) SD 01・SD 08・SD 09などから墨書人面土器・模型土器・土馬が出土した。墨書人面土器には、平底で球形に近い胴部と外反する口縁部とからなる甕Aの形態 (101)、平底で外方に開く胴部と大きく外反する口縁部とからなる甕Dの形態 (102・103)、口径 9.8cm・器高 4.9cmの小型丸底の壺の形態 (104) がある。いずれも口縁部をヨコナデするだけで、頸部以下は不調整で粘土紐の痕跡を留め凹凸が著しい。ハケ目調整を施した例は少なく、煮沸に使用した形跡もないことから、祭祀用に特別に製作したと考えられる。101は甕胴部の両面に人面を描き、102は眉のない顔でボタン状の粘土を貼り付けて耳を表現している。104は頸部から底部に向けて数条の墨線を配している。模型土器には皿 (113)・壺 (114)・鍋 (112)・竈などがある。113と114とは手捏製、他は粘土紐を巻き上げて成形している。竈はいずれも小片であるが、廂を持つもの (115) と持たないもの (116) とがある。土馬は SD 08から 6 点、SD 01から 1 点出土したが、いずれも破片で全容を窺えるものはない。

(註) 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報』1980年。



fig.43 祭祀用土器実測図 1 : 2.5 (101・104・110・115; SD 01 105~109・114; SD 08 102・103・111・116; SD 09 112; SK 10 113; SD 13) 113

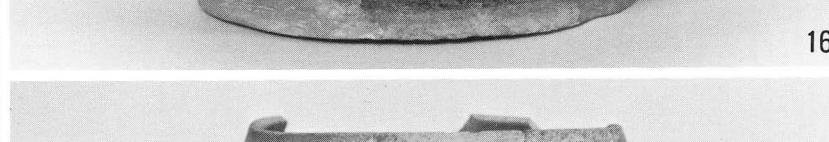
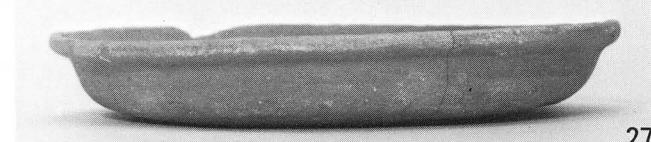
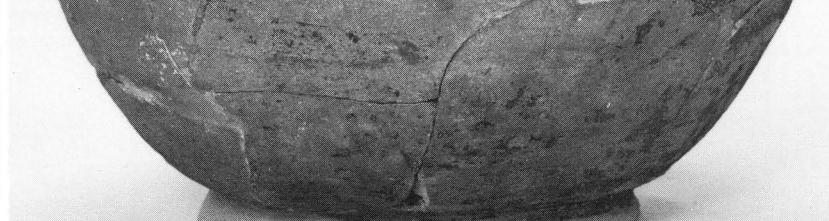
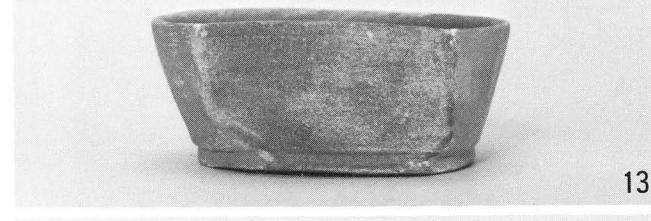
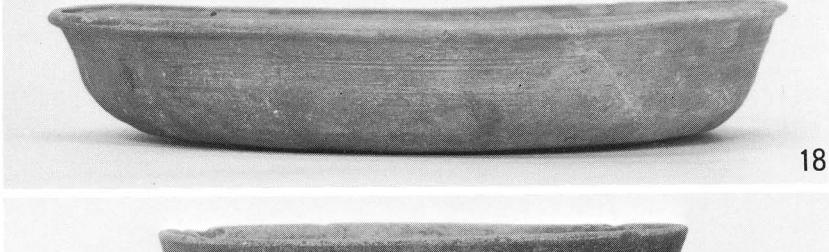
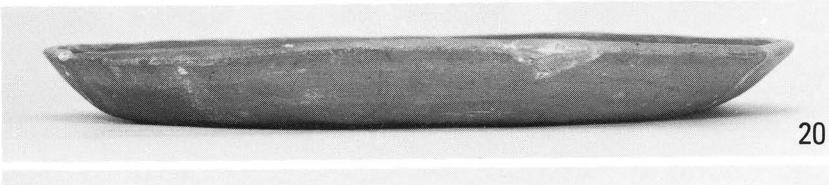
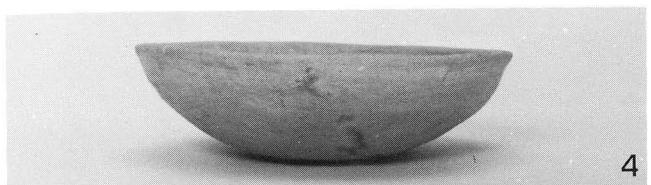
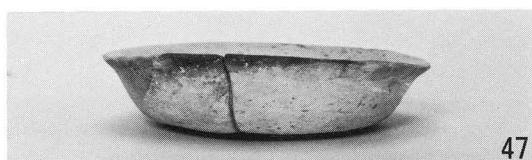


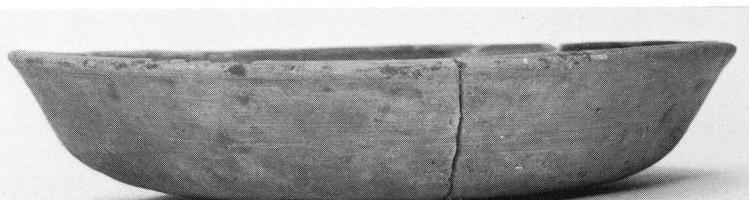
fig.44 出土土器 1 : 2 (20のみ 1 : 2.5)



fig.45 出土土器 1 : 2 (70のみ 1 : 4 )



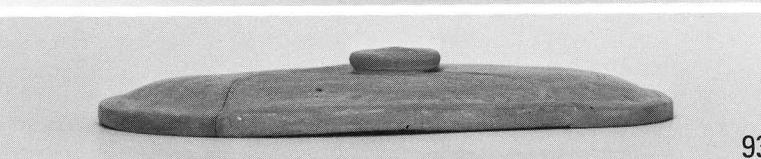
47



90



40



93



91



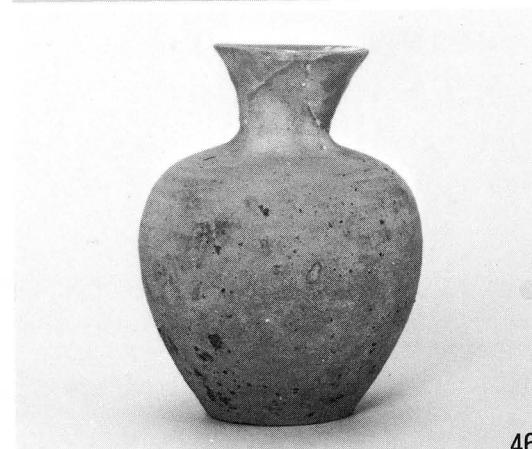
100



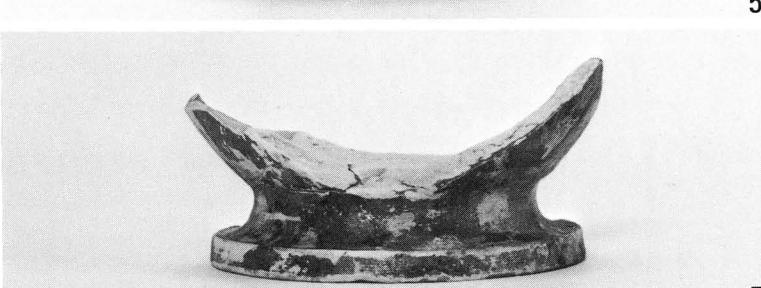
45



52



46



53



104



101

fig.46 出土土器 1 : 2

### 3. 木簡・木製品

**木 簡** 木簡はSD 01から7点、SE 18から1点の計8点が出土した。このうち釈読できるものは、SD 01出土の2点とSE 18出土の1点である。以下にその釈文をかかげる（釈文右の数字は長さ・幅・厚みをmm単位で示す。イタリック数字は木簡の形式番号。奈良国立文化財研究所『平城宮木簡』I解説 参照）。

SD 01出土	木簡 1	少□□	(80)×20×5	6039
木簡 2	(表)	□□道在道行 □		
(裏)	〔約カ〕 為□□	□	(163)×38×6	6081
SE 08出土	木簡 3	(表) □□郡 (裏) □□□ □□□ □	(131)×19×3	6059

**木 製 品** 今回の調査で出土した木製品は60点を数える。このうち、九条大路北側溝SD 01からの出土品（fig. 47-2～5・8・9・14・15）が最も多く、全出土量のおよそ半分を占める。次いで西一坊大路西側溝SD 08の出土品（同一1・6・7・10・13、fig. 48-1・2）もかなりの量にのぼる。このほか、SK 10・12（fig. 47-11・12）などの土壙からも少量出土している。

出土した木製品の種類には削掛け、人形、糸巻き、曲物の底・蓋・側板、折敷の底及び側板、櫛棒状品、その他がある。以下、品目毎に概略を述べる。

**削 掛 け** 削掛け（fig. 47-1～3）は4点出土している。1・3は上端を圭頭状に削り、圭頭部側辺に切込みをいれる。1は両側辺とも1回の深い切込みを施すが、3では片側だけ1回の切込みをいれ、他の側辺は近接した位置に2回切込んでいる。3の切込みは両側とも浅い。2は上端を欠き、頭部の形状は不明だが、1と同様の深い切込みがある。1・2は表裏とも割り面のままであり、3は削って仕上げている。1の現存長は26.3cmである。

**人 形** 人形（4～6）は3例あり、いずれも破損している。5・6は上端を圭頭状に削る。頭部下の側辺を切欠いて頸部を表わし、下端から深く抉って脚部とする。5は側辺に下方から切込みをいれて手を表現する。また、5は頭髪・顔面・鬚を墨描きし、胸部にも墨痕がある。4は非常に大型で現存長54.3cmを測る。

**糸 卷 き** 9は糸巻きの棒木である。外側面は全体を丸く削る。内側では中央部を平坦に削り、上下各5cmほどの部分は各々3回の削りによって面取りする。上下の両端は内傾する面を為す。なお、内側面中央部の平坦面には、三ッ目錐によって、横木と連結するための枘穴を穿っている。

**曲 物 底 板** 曲物の底板（12・13）は5点出土した。12はほぼ全形をとどめる。側面は全周を削って正円に整える。表面全体も木目に平行して幅広く削っている。周縁には側板を留める釘穴がある。釘穴は現在4箇所に残るが、本来5箇所で釘留めしていた可能性がある。13は全体の約1/2を残す破片である。表面が腐蝕し、加工痕は明瞭ではない。片面には部分的に赤色顔料の付いた形跡を認める。側面の釘穴は1箇所を確認し得るにすぎない。12・13とも柾目板を使用する。

**曲 物 蓋 板** 14は曲物蓋板の大半を欠く破片である。柾目板を使用し、周縁・両面とも削って仕上げる。周縁面は内傾する。下面には、側板位置を決めるための、コンパスによる針描きがある。針描きは縁部の内側0.5cmの位置にある。針描きの円弧をはさんで2孔一対のとじ穴があり、側板をとじた樺皮も残存する。この他、曲物側板の小片が多数ある。

**折 敷** 15は折敷の底板である。板目材の木裏面を上面として用いる。長方形の薄板の四隅を円く切落し

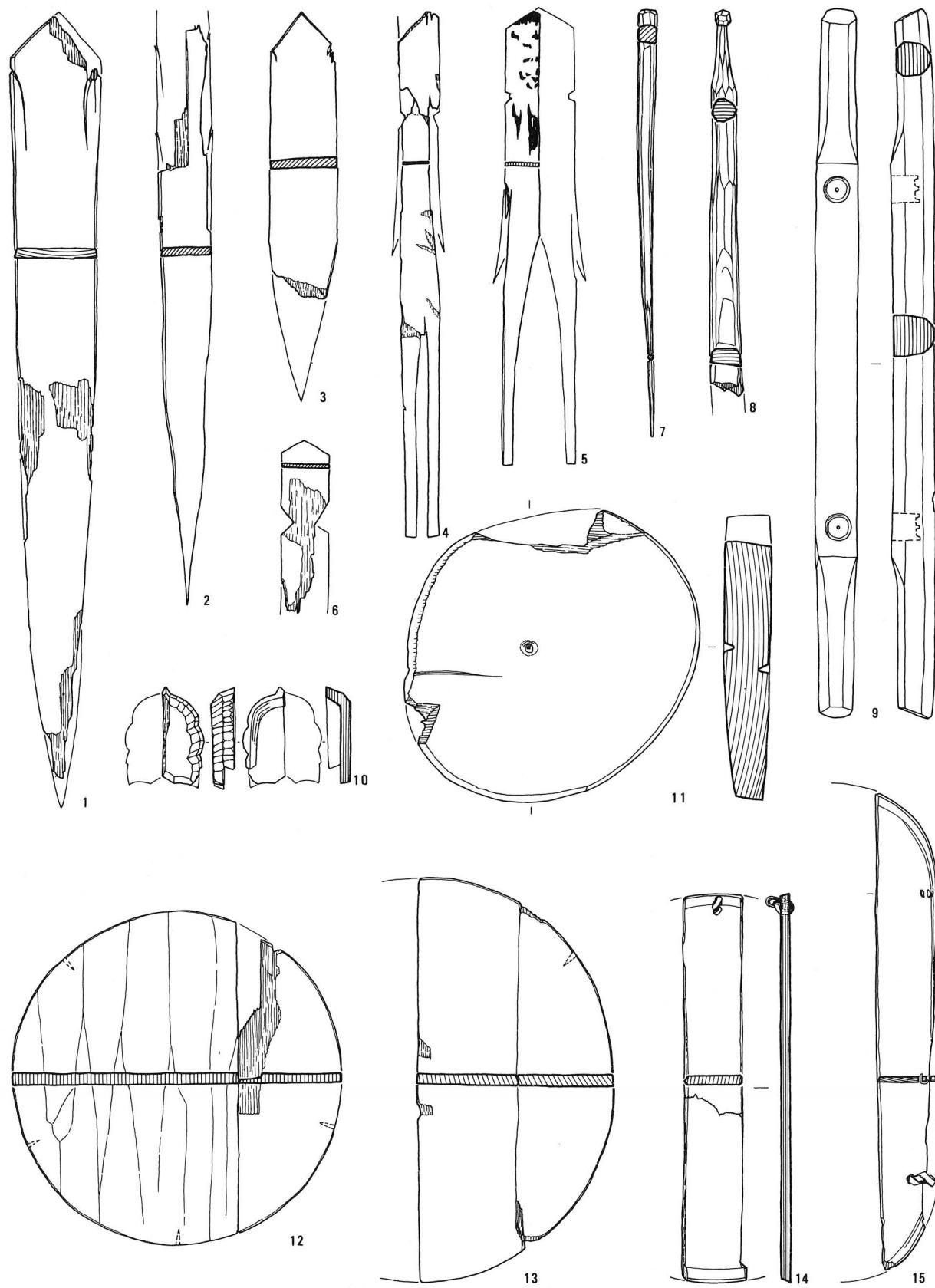


fig.47 木製品実測図 ( 1 ~ 3 · 5 ~ 11; 1 : 2 12~15; 1 : 3 4; 1 : 6 )

て全周を削り、周縁の端面は内傾する。両面もまた削っている。上面には周縁に沿った針描きの刻線があり、それに沿って側板のとじ穴が2箇所に残る。とじ穴は2孔一対で周縁の直線部の両端に位置する。なお、15に組み合うとみられる折敷の側板破片が出土しており、これと底板の大きさから推定すれば、長側辺25cm前後、短側辺18cm前後、高さ5cm以上の折敷が復原できる。

**棒状木製品** 棒状に加工した木製品は多数あるが、特徴的なもの2例をとり上げる。7は上端から下端までの全面を徐々に細めて削った留め針形の木製品である。下方約1/3の部分を特に丁寧に削り、下端を尖らせる。8は頭部を多面形に削出した棒状品で、下部は細かく、上部は幅広く削って仕上げる。

**鞘尻状の木製品** 10は先端に突起をもち、周囲を花弁状に整えた平面形を為す。内外面とも丁寧に削っている。側面には幅0.2~0.4cmの単位で2段の削りを施し、削りの境に縦方向の稜が走る。下縁の削りは1段である。内面は削り窪めて平滑に仕上げる。図では左右対称に復原したが、仮に同形のもの2枚を合せると刀の鞘尻に似た形態となる。しかし、その推定の当否については決し難い。

**円木板状** 11は部厚い板目板を略円形につくった円板形の木製品で、片面に2箇所、他面に1箇所の小さな穴を穿つ。

**櫛** 櫛(fig. 48)は2個体出土し、いずれも横櫛の小片である。1・2ともむねの線は直線的である。2では側面の一部が残っており、長方形平面で肩が角張る型式であることが知られる。1はむねの中央にわずかな稜をもち、2のむねは平坦である。2は現存高4.9cm、厚さ0.8cm、歯長3.9cmを測り、2の厚さは1.0cmある。3cmあたりの歯数は1・2ともに26本である。

**木製品の年代** 以上に掲げた木製品のうち、1・3・7~10・13・14は平城宮III期の土器に伴出し、年代の下限をおさえることが可能である。また、2・4・5・15に伴出する土器には平城宮IV期から平安初期までのものを含んでいる。

**中・近世の木製品** このほか、SD 01の上層にあたる現蟹川の旧流路から出土した中・近世の木製品がある(fig. 49)。その中から特徴的な二・三の資料をあげておく。

**皿状木器** 1は内面中央に稜を造り出して内部を2室に分けた皿状の木器である。腐蝕が進み、加工痕は不詳だが、おそらくロクロ挽きであろう。板目材を用いる。

**独楽** 2・3は広葉樹の心持材を円錐形にロクロ挽きした独楽である。直径は両者とも4cmであるが、3は丈が低く(1cm)、非常に扁平な形態をとる。3の下面中心にはわずかな軸を造り出している。

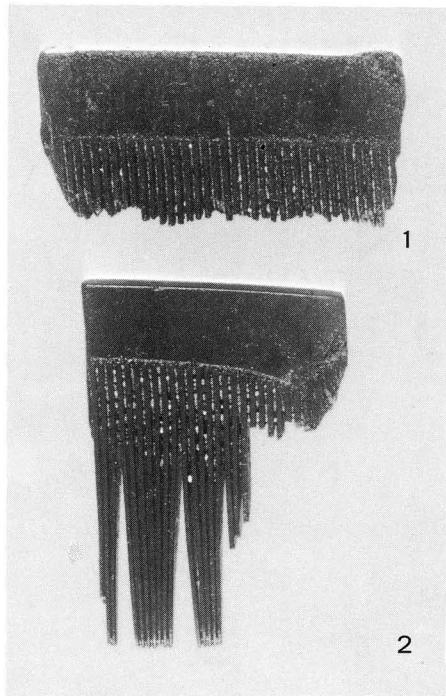


fig.48 櫛 1 : 1

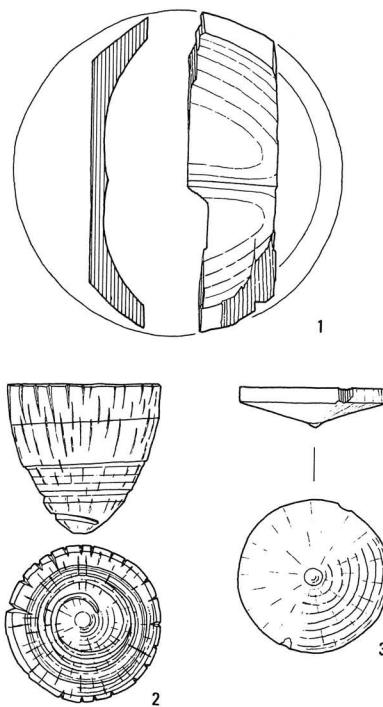


fig.49 中・近世木製品実測図 1 : 2

#### 4. 金属製品

金属製品には鏡及び銭貨があり、他に鍛冶関係の遺物として鞴羽口、鉱滓がある。

**鏡** 鏡(fig. 50) は SD 01下層から出土した仿製の小型海獸葡萄鏡である。遺存状態は良好で、部分的には暗緑色・暗赤紫色の錆を認めるが、鏡面・背面とも黄銅乃至赤銅色の光沢面を残している。鏡面径6.05~6.23cm、背面径5.92~6.07cm、縁厚0.54~0.68cmを測る。鏡面の反りは殆どない。外縁は鏽で仕上げるが、なお若干の凹凸を残す。背文の一部にも鏽をかけた形跡が認められる。

**鏡背の文様** 内区と外区は径3.9cm内外の突界圏によつて区画する。内区は伏獸形の鉢を中心に4軀の獸形を配し、界圏に沿つて葡萄の房を7箇所に置く。獸形は、鉢をはさんで対する位置の2軀ずつが各々類似した形態をとり、本来、所謂後獣形と竜形を交互に配置したものであろう。また、不鮮明ながら葡萄の蔓や葉の表現もみられる。外区には7翼の禽形を置き、その間に各1ないし2の葡萄の房を配する。房は合計10箇所に置く。禽形には数種の姿態があり、禽形を上から時計回りに追うと、1静止形、2飛翔形、3葡萄を啄む形、4同、5飛翔形、6同、7同（外向き）の順となる。

この種の鏡は現在までに11面の例が知られており（表3）、大きさや文様の共通性によつて同范の作とみられている。その中で本例は最も良好な鋳上りを示すが、特筆すべきは、これが平城宮III期の土器に伴出し、從来不明であった実年代の一端を確認し得た点であろう。

**銭 貨** 和同開珎(fig. 51) が合計8枚出土した。ここに取扱った6枚は SD 17から一括で出土した資料である。いわゆる古和銅に属する例はない。銭文は角張った字体に共通の特徴をもち、すべて「開」を「開」につくる。直径は2.42cm (4) ~ 2.52cm (1) の範囲にある。



fig.50 小型海獸葡萄鏡 1 : 1

	地名	径(cm)	縁厚(cm)	備考
1	宮崎県東臼杵郡南郷村神門神社	5.85		神社伝世
2	兵庫県宝塚市中山勅使川窯址	5.90	0.30	古窯址出土
3	奈良県桜井市大福	6.10	0.60	遺物包含層出土
4	奈良県吉野郡天川村金峯山	5.60		経塚出土
5	京都府北桑田郡京北町周山庵寺	5.95	0.60	寺院址出土
6	三重県鳥羽市神島町八代神社	6.10	0.60	神社伝世
7	同上	5.8~6.0	0.55	同上
8	同上	6.20	0.65	同上
9	同上	6.1~6.2	0.60	同上
10	同上	6.00	0.65	同上
11	同上	6.00	0.65	同上
12	東京都国分寺市武藏国分寺址	6.2~6.3		寺院址出土

表3 小型海獸葡萄鏡地名表

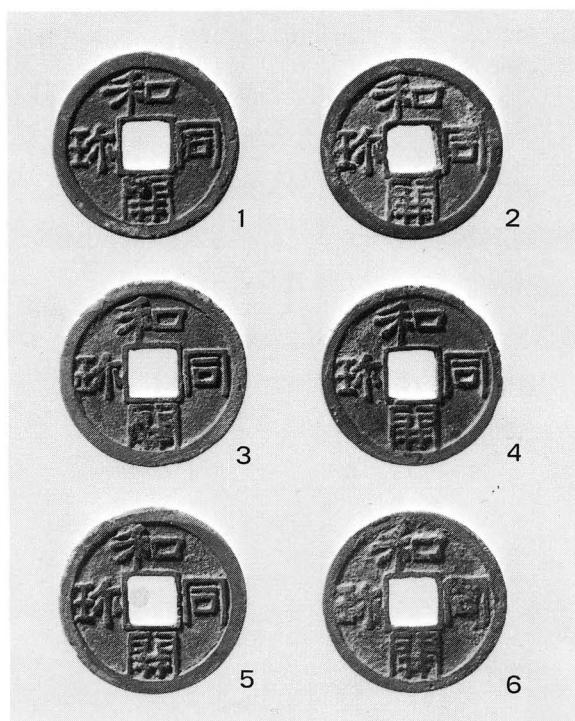


fig.51 SD 17出土和同銭 1 : 1